

LIBRA SQUARE

Book

最近, おもしろかった本

『思い出トランプ』

向田邦子 著 新潮文庫 420円(税込)

普段の生活の中のさりげない風景 身に覚えある主人公たちの愚かな弱さ

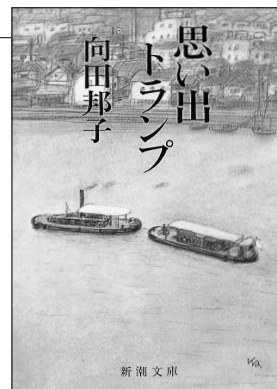
本書は、13編が収められている短編集であり、短編の長さも本の重さも通勤時間の中で読むのにちょうどよい。この短編には、ごく普通の人誰もがひとつやふたつは持っている弱さや、狡さ、うしろめたさなどが、日常生活のささやかなエピソードの場面に織り交ぜて描かれている。浮気の相手であった部下の結婚式に妻と出席する男の心境や、おきやんで、かわうそのような残忍さを持つ人妻、毒牙を心に抱くサラリーマン、やむをえない事故で子供の指を切ってしまった母親の心情など、ごくごく穏やかであたり前の日常の中でそっと繰り広げられる人間模様が、作者の暖かい目で綴られている。

各短編の主人公たちの愚かな弱さは、どれも、自分の中に覚えのあるもののような気がしてならない。どの短編の場面

も普段の生活の中のさりげない風景であって、劇的なドラマが起こるわけでもないのに、なぜか常識的な人が常識的な生活の中で懸命に生きているという「生」が淡々と感じられるのである。情緒豊かな文章で、人が心に抱く少し後ろ暗い部分は、人の愚かさでもあり同時にかわいらしさでもあると、書かれているからかもしれない。

ぎゅうぎゅうに混雑した通勤電車の中で不快な気持ちでいっぱいになりながら、この短編集を読むと、人の弱さや自分本位な気持ちをふと許せる気持ちになれる。そんな時は、隣の人を押しつけていた自分の右ひじの力を、そっと緩めている。

(会員 鶴田 恵美)



Cinema 心に残る映画

『激突!』

1971年／アメリカ／スティーブン・スピルバーグ監督作品

追ってくる殺人タンクローリーとの「死闘」 シンプルさゆえ幼心に深く残る恐怖映画

心に残る映画、と言われて…私にとって、まさに幼心に鮮烈に残っている映画である。幼心というか、おそらくこれまで観た映画の中で、最初に心に残った、というか心の恐怖トレイに最初に入った映画である。念のため、オンタイムではなく、テレビで観たのが最初である。

「激突」という邦題だが、原題名は「DUEL」（決闘、果し合い）である。まさに、「死闘」。あのスピルバーグのデビュー作である。

映画は、ごくごく平凡なサラリーマンが、アメリカの田舎のハイウェイを昼下がりのにんびりと走るシーンで始まる。周りには何も無い。乾いた岩、砂、時々何分もかけて轟音を立てて通過していく長蛇の貨物列車など。…気付くと途中、1台の大きなタンクローリーが前を走っている。タンクローリーの背には「FLAMMABLE」（可燃物）、いい具合に薄汚れており、少々危険そうである。彼は何気なく追い抜く。タンクローリーは遅いし、彼は少々急いでいるし、何より、排気ガスの黒煙がたまらなかったからである。…と、ここまではよくありそうな？話であるが、これが恐怖の始まりとなる。

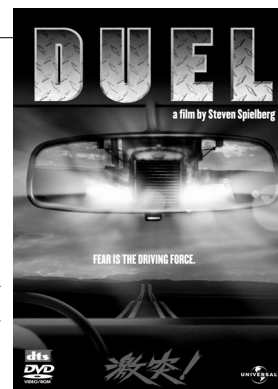
巨大なタンクローリーは、追い越されたことに怒ったのか、レースのつもりなのか何なのか、とにかく執拗に、轟音のホ

ーンを鳴らしながら黒煙を上げて彼を追いまくり、文字どおり殺人タンクローリーと化す。そのタンクローリーの顔を正面から見ると、平易な言い方だが、とにかく恐ろしい。子供が見たらトラウマになってしまいそうである（私は今でもタンクローリーの顔は何となく怖い…）。しかし、その運転手の顔はとうとう一度も出てこない。運転手の顔が見えないだけに、タンクローリー自身の殺人的な人格、とも言うべきものがとてもよく浮き出ており、恐怖に凄味が増す。

何で俺が追われるんだ?! 俺が何をしたんだ?! と、サラリーマンは訳も分からず、恐怖のうちに逃げ道のない一本道をとにかく逃げ続ける。終始、追われる恐怖でいっぱいである。そして、この「死闘」の結末は……断末魔の叫びである。どちらのものは、是非ご覧いただきたい。

スピルバーグは、撮影に入る際、何台ものタンクローリーを並べて最も怖い顔のものを選んだという。これに追いかけられ続ける恐怖、という極めてシンプルなストーリーなのであるが、地の底から這い上がってくるようなとても深い恐ろしさがある。シンプルだけに、子供心に深く深く残った恐怖映画であった。

（会員 高橋 伴子）



『激突!』 スペシャル・エディション
ユニバーサル・ザ・ベスト キャンペーン商品
価格: 1,800円(税込)
発売元: ユニバーサル・ピクチャーズ・ジャパン